

目視での取り違え防止

日輪（永井元章社長、東京都中央区）は液体輸送用の配管をつなぎ合わせる継手を照合する「液送用継手照合システム」を1月から本格的に運用する。鹿島事業所（茨城県神栖市）を皮切りに導入し、2023年9月期中对象とするグループ全13事業所への実装を完了。継手に起因するトラブルは年に1、2回だが、定時納品や安全の阻害要因となり得るリスクの芽を摘み取る。

（沢田顕嗣）

鹿島事業所で本格運用 来月

液送用継手照合システム 止につなげる。
はグループの2社（サンマシ、サイテック）と共同で開発。サンマシ（永井社長、茨城県神栖市）が継手に製品名とQRコードをレーザー刻印し、サイテック（同社長、東京都中央区）は正しい継手であるかどうかをパソコンの画面上で突き合わせるられる仕組みを構築した。

ドライバーは業務の内容を記した指示書に示された継手を用意した後、指令書と継手のQRコードを続けてスキャンする。これにより正しい継手を選択したかどうかを確認でき、目視によるヒューマンエラーの防



期間と位置付け、乗務員に対する教育・指導とトライアルを実施しており、年明けから正式に運用すること、1、2の両月には印西事業所（千葉県印西市）、新潟事業所（新潟県胎内市）、大阪事業所（大阪府摂津市）の各拠点でトライアルを行い、乗務員への教育・指導などに当てる2カ月間に問題が起きなければ、3月から本格運用をスタートさせる。

他の事業所にも3拠点ごとに時期をずらして2カ月のトライアル期間を設ける手順を踏み、今期中に13事業所で液送用継手照合システムを本格的に運用する体制を整える。

日輪グループは約580台のタンクローリーを運行しているが、液体の納品時に用いる継手は150前後の種類に上るといふ。乗務員が継手を取り違えて現場に向かうケースはまれにしか起きないが、取りに戻ると納品の期限に間に合わずに生産ラインを止める恐れもある。

継手が違うことに気付かずに納品すると、液体が地面などにこぼれる可能性も排除できない。これらのリスクは液送用継手照合システムの活用で大幅に低減できると構想している。

日輪の根津裕明・運輸事業本部安全管理指導部主任は「教育や現場パトロールをこれまで泥臭くやってきたが、社内のIT（情報技術）化を一気に進めていることもあり、安全と品質を高めるためにITを活用することを構想している。」と話す。

るに至った。継手の選択を間違えることにより、お客さまに迷惑を掛ける事態を一つでも減らしたい。今後安全と品質の更なる向上を目指し、ITを駆使して色々なることに取り組んでいきたい」と話している。